

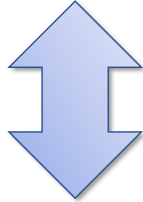
浜松まつりの始まり



一説によると・・・

約460年前の永祿年間(1558～1569年)に、当時の浜松を治めていた引間城主の長男誕生を祝い城中高く風を揚げたことが起源といわれている

記録は残っておらず、確定要素ではない。



記録に残るものとして・・・

寛政年間(1789～1800年)の記録に風の記述がある。

「遠州のからっ風」と呼ばれる強い風が吹くこの地は、気候的に風揚げに適切で、子供の誕生を祝う「初風」の伝統は浜松まつりとして現在までこの地に息づいている。

江戸から明治へ時代は遷移、初風・風合戦は本格化

町民自らが作り上げた浜松まつりは、江戸から明治へ時代の遷移とともに本格化します。

以下の2点が最大の要因となっていましたが、それを支えたのも紛れもなく町民たちでした。

1. 遠州地方が遠州灘から強い風が吹き、風揚げに絶好の場所であったこと
2. 東西の文化の合流地点という立地条件だったこと

風は相良・横須賀・袋井など多くの土地にあります。浜松は特に盛んです。

浜松藩には24か町の職人の町がありました。



伝馬・塩・鍛冶・元魚・田・連尺・大工・紺屋・肴・旅籠・板屋等の町で、ここが後の風揚げの中心を担う街になっていきました。



江戸時代に定着したと言われる風揚げは、明治に入って活気を帯び明治20年頃には本格化していきます。

そして長男誕生後、その子の成長を願う目的で風を揚げる初風の風習が、遠州地方に広がりました。

大正期は和地山練平場で大風合戦

こうした歴史の積み重ねの中で、各町で行っていた風揚げを一ヶ所で行おうとする機運が高まります。

場所の選定までの流れは以下の通りです。

1. 鉄道工場建設予定地を借用して、行うようになる



2. その頃、自主的な管理組織として統監部が結成、次第に組織化される



3. 大正8年4月26日に統監部が歩兵第67連隊を訪問、和地山練兵場(現：和地山公園)を風揚げ会場にと申し入れ



4. 連隊側は、練兵場の使用を許可。
第二次世界大戦開戦直前まで毎年ここを舞台に風揚げが展開される

連隊側から見て、浜松出身の兵隊は商家出身が多く、全国的に体格が劣るので、男性的で活発な風揚げは体を鍛える手段の一つになると踏み練兵場の使用を許可しました。

終戦後からの浜松まつり

第二次世界大戦終戦後、浜松は焼け野原となってしまう地域全体が意気消沈。

そんな中で復興へ進もうとした昭和23年、凧揚げ会場を一時的に中田島に移し、第1回の凧揚げが城下町24か町を中心に50か町余りの参加を得て盛大に開催されました。

昭和25年、市民あげてのお祭りにとの願いを込めて内容・組織を充実化



「浜松まつり」の誕生

それに伴い、運営形態・参加町数に変遷します

運営形態

当初は、
浜松市自治会連合会、(公財)浜松・浜名湖ツーリズムビューロー
浜松商工会議所、浜松市の4団体からなる **浜松まつり本部** を組織

平成23年12月より、
浜松まつり組織委員会 に運営主体が引き継ぎ

参加町数

戦前は、参加町数は40～50の間で推移していた

近年は、170を上回る町が参加している。
夜の御殿屋台引き回しに関しては、80を上回る町が参加している
+
中断していた高校生の参加も、平成5年から復活